*Dubliner*s における家族の肖像写真に見る共同体

岩下　いずみ

一　はじめに

19 世紀ヨーロッパで写真は一般化していき、家族が映った肖像写真は記録と思い出になり、結婚、家族、共同体の確認作業を映し出した。ジェイムズ・ジョイスの短編集 *Dubliners* (1914) 中数編で肖像写真または写真についての言及や描写があり、本発表ではこの四作品のうち家族の肖像が登場する“Eveline,” “A Little Cloud,” “The Dead”に注目する。共同体は、大きくは国、小さくは家族が例として挙げられるが、家族の肖像写真の特徴に見られる当時のアイルランドの社会背景を通して、ジョイスが示唆する共同体のあり方について考察することが本発表の目的である。

二　アイルランド大飢饉と家族の肖像写真に見る「麻痺」と「共同体」

19 世紀中頃、アイルランドでは大飢饉が全土を襲っていた。国勢調査によると、大飢饉前の人口は約八百万人だったが、大飢饉後には約六百万人へと減少した。大飢饉の後、国民の結婚年齢が上がり出産が少なくなったが、このことは大飢饉の打撃と影響が根強く残っていたことを示し、それが *Dubliners* 全体に影を落とす共同体の危機となっている。*Dubliners* の舞台である 1890 年代から 1904 年という時代には大飢饉はつい最近のものであり、老人の登場人物は過酷な時代を生き延びていることが考えられる。“The Dead”の主人公ゲイブリエル・コンロイの叔母姉妹ジュリアとケイトは大飢饉そのものを体験したのではないかもしれないが、その余波がより色濃い中で成長したことが推測できる年齢である。飢饉の陰鬱な記憶が残るアイルランドでも肖像写真は発展していたことが、“A Little Cloud”と“The Dead”の中で家庭に飾られる肖像写真からうかがわれる。しかし皮肉なことに家族全員が写っている肖像写真は *Dubliners* の中で一つも描写されない。この点から、社会的状況の影響や、それによる家族生活の苦境が反映されていることが推察される。社会における最小単位の共同体である家族が、業績を記念することも、儀式を経ることもできなかった、というのが *Dubliners* で描かれる現実である。こうした共同体の危機的状況、ジョイスの言葉で言うところの「麻痺」が肖像写真の描かれ方によって作品で浮き彫りとなっている。「麻痺」は *Dubliners* 全体に漂う飢饉の影響や停滞感を表し、作品全体のテーマでもある。これらの点から、「麻痺」はこう着状態、共同体の老いや死、危機的状況と繋がる単語であると言える。

ジョイスは *Dubliners* においてダブリンを “the centre of paralysis” (*Letters* II 134) として “a style of scrupulous meanness” (*Letters* II 134) と “my nicely polished looking-glass” (*Letters* I 63-64) をもって描いたとしている。「細心の(scrupulous)」、「磨かれた(polished)」、という作為・意図を感じさせる表現は、カメラの特質とも共通する部分があるだろう。カメラを介して撮影される写真、すなわちジョイスの作為的なスタイルから描き出される作品は、あくまで対象の一面であり、鑑賞者もしくは読者は対象の他の面を想像することになるのである。

三　共同体と未婚の老女 ― **“The Dead”と“Eveline”**

“The Dead”で登場する写真は、ゲイブリエルの亡母エレンと子供の頃の弟コンスタンティンの肖像写真のみである。肖像写真がないことには貧しさ以外の理由もある。家族という共同体において何らかの破綻や欠落、劣等感がある場合である。客間の肖像写真はその家の住人ではないゲイブリエルの母と弟のもので、住人ケイトたちのものは少なくとも描写や言及はされない。大飢饉の結果として、当時のアイルランドの平均結婚年齢の高さが挙げられ、女性は独身のまま老い、人生を終えることも多かった (Walzl 34)。叔母たちの肖像写真が居間にないことは、共同体としての家族に自分たちが加われず、その代替物として理想の親子像、つまり姉とその子供の肖像写真を飾り老齢を過ごしていることによって満たされる。

ケイトやジュリアは生涯独身であろう老女であり、その予備軍とも言える存在が短編“Eveline”の十九歳の主人公エヴリンである。彼女は安月給で働き、母の死後一家をまとめる役割で、父の家庭内暴力に耐えながら弟たちを守る。そのような生活からの脱出の道が船乗りフランクからの求愛だったが、父に交際を反対される。フランクとの駆け落ちを前にして、エヴリンは家の居間に飾られた写真を眺める。壊れたオルガンの上には「司祭の黄ばんだ写真」が飾られているが、家族の肖像写真について言及はない。この写真は家族の体裁を繕い、信心を示すものとして機能しているが、居間の「黄ばんだ」写真には家族という共同体の破綻が暗示されている。司祭の写真は、カトリシズムを表すものである一方、司祭が現在メルボルンにいるとの説明から、海外脱出のイメージも持ち合わせている。エヴリンは船上のフランクとともに旅立つことはなく物語は終わる。結末

でのエヴリンの“a helpless animal” (32) のような顔は「麻痺」の象徴でもある。「麻痺」は *Dubliners* において老いや死を暗示し、居間に飾られた司祭の肖像写真はこの結末の暗示とも考えられる。司祭の写真はまた、カトリシズムの教えを守り家庭を守る女性と、国外脱出し幸福を追求する女性という二つの相反する女性像をも暗示している。

四　共同体と既婚男性 ― “The Dead”と“A Little Cloud”

一方、当時のアイルランド人男性の婚期は 35 歳から 45 歳頃 (Walzl 34) であり、女性の結婚年齢が高いことと考え合わせると、結婚に対しての障壁が社会全体で大きかった。前節で論じた肖像写真にはゲイブリエルと父の姿はなかったが、その理由は不明である。客間に飾る完璧な家族像を叔母姉妹が求めていると仮定すると、母と弟だけの肖像写真は不自然と言えるかもしれない。ゲイブリエルによって想起される母の思い出は、アイルランド西部の出身である妻のグレタを母が馬鹿にしていたこと、亡くなる前の母をグレタが介護したことである。これらは写真を見たことで引き出される。彼はパーティ後ホテルに戻った後の妻とのやり取りで、自分が知らなかった彼女の一面に大きな衝撃を受ける。亡きマイケル・フューリーへのかなわぬ恋慕をいまだに抱いているとの告白から、彼もまた亡き母と同様に彼女を理解せず軽々しく捉えていたことが露呈する。ゲイブリエルは、この瞬間に成長の機会を得て許容、寛容、成熟の契機となる涙を流して作品は幕を降ろす。

ゲイブリエルと同じように文学に傾倒し、同じ年頃だと思われる既婚男性が、 “A Little Cloud”の主人公チャンドラーである。32 歳の彼は去年結婚し男子が生まれたが、いまだに何かを書いて身を立てたいという思いがある。チャンドラーは妻不在の際に、新婚時代の彼女の写真を眺めて、“He [Chandler] looked coldly into the eyes of the photograph and they answered coldly” (68)と、写真の中の妻と冷たい眼どうしの「対話」をする。眼が分離して妻本人となり、まるでそれと結婚したかのようなこの描写は、チャンドラーの妻への理解、愛情が部分的であり、すなわち欠落していることを示している。結末でチャンドラーが流す涙は、自らの望まない生活を送っている現実を認識し、痛烈に状況把握をした結果である。そして、作家としての未来を願う彼が、写真に表される過去、すなわち結婚という決断とそれに連なる家庭生活の失敗に囚われているさまを描き出す。

“The Dead”結末の“Generous tears filled Gabriel’s eyes. ... His own identity was fading out into a grey impalpable world: the solid world itself which these dead had one time reared and lived in was dissolving and dwindling” (194) という描写に示されるゲイブリエルの自己認識と他者受容・寛容の涙は、アイルランドという共同体に属する者全てへの涙である。写真は男性の未熟さを示す引き金として、“The Dead”と “A Little Cloud”で役割を与えられると共に、彼らの成長や老成への契機となる媒体と言えるだろう。 “The Dead”は *Dubliners* の締めくくりの作品であり、ゲイブリエルの寛容の涙は、「麻痺」に冒されたアイルランドという共同体に向けられている。

五　おわりに

ジョイスはアイルランドの「麻痺」の実像を、麻痺した共同体に属して老い、死んでいくダブリンの人々を通して描いている。障壁の大きい結婚や信条のあり方によって、共同体に属するか否かの選択肢を与えられない当時のダブリンの状況こそが問題、「麻痺」であるとジョイスは考えていた。*Dubliners* における家族の肖像写真は、何らかの欠落、「麻痺」を示すものである。こうした欠落、ズレの要素が相互補完や扶助によって満たされる可能性があることも家族の肖像写真には示唆されている。「麻痺」を生み出す根源も共同体にあるが、「麻痺」から脱するためのヒントも共同体にあると言える。その一端は、*Dubliners* の最後に収められた “The Dead”の結末でゲイブリエルが流す寛容の涙に見られる。すなわち、自己の「麻痺」に気づき、他者への共感、寛容に目覚めることが「麻痺」を打ち破るのに必要な第一段階だということが、死者も含んだ共同体に対するゲイブリエルの涙に示されているのである。*Dubliners* における家族の肖像写真は、アイルランド大飢饉の記憶と重ね合わされ、共同体のあり方、共同体の歴史を映し出す。ジョイスは家族の肖像写真のさまざまな欠落を意図的に作品に組み込むことで、登場人物やアイルランドの抱える欠落、そしてそれを補完するための新たな共同体形成の必要性を暗示している。

引用文献

Joyce, James. *Dubliners: Authoritative Text, Context, Criticism*. Edited by Margot Norris, Norton, 2006.

---. *Letters of James Joyce*, I. Edited by Stuart Gilbert, Viking, 1966. 3 vols.

---. *Letters of James Joyce*, II. Edited by Richard Ellmann, Viking, 1966. 3 vols.

Walzl, Florence L. “*Dubliners*: Women in Irish Society.” *Women in Joyce*, edited by Suzette Henke and Elaine Unkeless. U of Illinois P, 1982, pp. 31-56.